

1 派遣期日 令和6年11月22日（金）

2 派遣先 学校名 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
所在地 〒232-0061 神奈川県横浜市南区大岡2丁目31-3
<https://yokochu.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 研究テーマ 『生徒が自ら「学びのプロセス」を進めるための手立てと評価』

(2) 授業内容 第2学年 数学 確率

学習課題：どちらの場合の方が起こりやすい？

①	2人でじゃんけんを1回行い、あいこになる。
②	3人でじゃんけんを1回行い、あいこになる。

授業の流れでは、直観から起こりやすさを予想し、次に具体的な活動から統計的な確率を求める。そして最後に数学的な確率を求めていた。その際にスプレッドシートを活用し全体で共有しながら活動していた。



《実際の活動の様子》



《スプレッドシート共有場面》

樹形図を使って解く生徒が多く、ほとんどの生徒が2人の時も3人の時も同じ確率であいこになることを確認できていた。

次に発展的な課題で、「4人でじゃんけんを行った場合は？」という問いに対して、ほとんどの生徒が同じと答えていたが、1人の生徒が「ちょっと違うくない」という疑問をもち、2つ目の課題に取り組んでいった。面積図を使って何人かの生徒に説明を求めることがあり視覚的に捉えさせたかったように思えたが、時間になってしまった。

タブレットだけではなく、計算をノートに行ったり全体で共有したりして、学びの多い授業であった。

(3) 観点別学習状況のあり方

今回の研修では、「学びに向かう力」が高まっている生徒の姿、「学びに向かう力」高めていくための指導と評価の工夫にポイントを絞っている。

【「学びに向かう力」が高まっている生徒の姿】

場合の数を基にして得られる確率（数学的な確率）を用いて、日常生活や社会に関わる事象の起こりやすさを読み取り考察しようとしたり、求めた確率を根拠として説明しようとしたりする姿

【「学びに向かう力」を高めていくための指導と評価の工夫】

ア．「知識・技能」の指導と評価

多数回の試行によって得られた確率と場合の数を基にして求めた確率とを関連付けて、求めた確率を実感を伴って理解できるように指導する。また、同様に確からしいことに着目し、樹形図や表などを利用し、起こり得る全ての場合を簡単に求めることが出来るように指導する。学習の状況は、ワークシートの記述や小テストを実施し、その成果から総括的に評価する。

イ．「思考・判断・表現」の指導と評価

同様に確からしいことに着目し、樹形図や表などの数学的な表現を用いて説明し、伝え合うことを通して、場合の数を基にして得られる確率の求め方を考察し、表現できるように指導する。学習の状況は、ワークシートやレポートの記述から総括的に評価する。

ウ．「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価

確率を求めることだけを目的とするのではなく、不確定な事象に関する問題解決を重視し、生徒が確率を用いて説明しようとすることを大切にする。日常生活や社会に関わる事象を取り上げたり、数学的活動を取り入れたりしながら学習を進めることで、生徒が確率を学ぶ意味を実感することにつなげる。学習の状況は、ワークシートやレポートの記述、また学びのプランの記述から総括的に評価する。

(4) 生徒が粘り強さを発揮し、自らの学習を調整するための場面や学習活動の工夫

「課題の工夫」と「生徒が自ら条件換えを行い、課題解決に向かわせること」を学習活動に取り入れている。課題の工夫に関しては、生徒にとって解きたいと思わせる必然性を伴うものが望ましいと考えている。日常生活の中で生徒が選択を迷いそうな場面や学校生活の行事と結びつくような場面を意識した課題などを提示することで、その必然性が高まるように感じる。まずは、課題を工夫しその出会わせる方を意識している。課題と出会わせ、単元の学習を深めるためにも「日常生活や社会に関わる事象」と「数学の事象」をバランス良く扱う必要がある。日常生活や社会に関わる事象に関する課題は、様々な条件が入り込み、複雑化され、単元の学習目標を見失うこともある。逆に、数学の事象に関する課題は、学習目標が明確ではあるが、単元を学習する意味が薄れることもある。そのため、両方の事象を意識しながら、生徒が自ら条件換えを行い、課題解決に向かわせることを学習活動に取り入れている。例えば、人数を変えたり値段を変えたりといった数字を単純に変えるだけでも、自分で作り上げた課題のため、粘り強く取り組むように感じる。また、条件を変えて課題解決を図ることは、解決方法の復習や学び直しにつながるため、学習を調整しようとする姿が現れやすい。これらの点を意識して課題設定していた。

4 感想

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校の生徒は、一人一人が積極的に考えて学んでいる様子が見られた。数学の授業では、生徒が「前のめり」に没入している姿を大切にされていて、それを3つのポイントから見とっている。観察や操作、実験などの具体的な体験活動を通して数学的な事柄を確認すること、単元で身につけた力を生徒がそれぞれに活用できる課題によって学習内容の価値を自覚化すること、既習との比較から「新たな問い」を見出すこと、その中でも「課題の工夫」は今回の授業を参観してとても重要に感じた。

- 1 派遣期日 令和6年10月25日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）熊谷市立新堀小学校
所在地 〒360-0841 住所 埼玉県熊谷市新堀182
<http://www.kumagaya-niibori-e.ed.jp/>

- 3 研修内容 第26回 関東地区小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会 埼玉大会
(1) 公開授業 第4学年2組

① 単元名

「共に生きよう～誰にでもやさしいまちづくり～」

② 単元の目標

福祉について調べる中で、新堀地区で生活する人には様々な諸課題があることに気づき、思いや願いを理解することで、共に生きようとする意欲や実践的な態度を育てる。

③ 授業の実際

この単元は、「地域の方々と交流をし、笑顔にしたい。」という児童の願いをもとに探究課題が設定され、活動が行われていた。学習過程を「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ表現→課題設定」と分類し、その流れに沿って活動を行ったことにより、「地域の人と仲良くしたい(課題設定)→地域にはどのような人がいるのか調べよう(情報収集)→地域のお年寄りの方と交流会を開こう(整理分析)→校長先生と公民館長へ提案をしに行こう(まとめ表現)→交流会でやるべきことを話し合おう(課題設定)」というように、学習の流れが明確になり、活動を円滑に進めることができていた。また、多様な年代の人が公民館で交流できるようにするための方法について考える場を設け、「新堀小コミュニティサークル Smile!!」というサークルを立ち上げ、地域の方と継続的に繋がることのできる場の確保を行っていた。さらに、実際に交流会を行う前には、安全に楽しく交流するための手立てについて考える機会を設けていた。お年寄りと交流する前に高齢者疑似体験を行ったり、未就学児と交流する前に幼稚園の先生から幼児と関わる際のアドバイスをもらったりするなど、体験的な活動やゲストティーチャーの活用を効果的に行っていた。

本時の活動は、前回の交流会の内容を振り返り、次の交流会に向けて活動をレベルアップさせるための話し合いを行う、というものであった。前回の交流会の動画を見て客観的に活動を振り返ったり、ゲストティーチャーから動画でアドバイスをもらったりしたことで、児童は意欲的に次の交流会に向けての改善点を考えることができていた。また、これまでの話し合いの資料を活用し、相互指名で話し合いを進めたことで、意見交換が活発になっていた。



ゲストティーチャーに関する掲示物

(2) 基調提案

① 大会テーマ

つなぐ・いかす・深める～ワクワクする本物の学びを目指して～

② 提案の実際

新堀小学校では、子供たちの学びを身近な「ひと、もの、こと」と結びつけ、本物の実践に可能な限り近づけた授業の展開を目指し、基本となる「4つの結び付き」を授業の柱とし、ワクワクする本物の学びを目指した研究を進めていた。

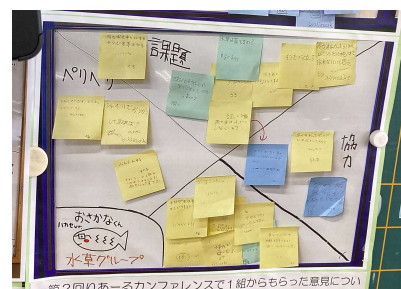
「4つの結び付き」の1つ目は、「学習内容・児童の思いや願いと生活・学習の場面」の結び付きである。生活科の課題や総合的な学習の時間における探究課題を、生活の場面や現代の諸問題等と結びつけ、児童が自己の生き方と関連させながら学習し、思いや願いを実現できるようにしていた。「にいほりあーるるーむ」という特別教室には、全学年の生活科・総合的な学習の時間の写真や図、作成したものが活動の流れに沿って提示され、子供が自ら立ち止まって考え、活動の意欲を高めることができるようになっていた。



「にいほりあーるるーむ」の掲示物

2つ目は、「生活科・総合と、他教科等の結び付き」である。生活科・総合的な学習の時間に他教科等の学びを想起し、活用できるようにすることで、学習対象を様々な視点から捉えたり考察したりする活動が充実できるようにされていた。4年生では、「公民館の館長さんにお話を聞きに行く。」という総合の活動と関連させて、国語科で「メモの取り方の工夫」の授業を行うなどの工夫が行われていた。

3つ目は、「自分との気づきと他者の気づき」の結び付きである。「考えるための技法」を児童自身が選択し、思考ツールを効果的に活用したり、他者の考えに触れた後に自分の考えを再構築する時間を確保したりすることで、知識の構造化を目指していた。また、板書する際に文字を囲むチョークの色を「青：手立て・課題・疑問」「黄：キーワード」「赤：考えのつながり」と統一したり、板書を蓄積して校内研修を行ったりすることで、子供たちの意見を結び付ける構造的な板書を作成することを目指していた。



思考ツールXチャートの活用の様子

4つ目は、「前の自分と今の自分」の結び付きである。学習の見通しや振り返りを大切にしたり、ワークシートやICTを効果的に活用して学びを蓄積したりすることで、自己の変容に気づき、学びを深く実感し、学習内容を深く理解できるようにしていた。

4 感想

児童の「もっと知りたい」「これを達成したい」という思いや願いをもとに課題を設定し、「4つの結び付き」を意識して学習進めているからこそ、新堀小学校の生活科・総合的な学習の時間は、児童が自分事として本気で学ぶことのできる時間になっているのだと感じた。今回の研修で得た内容を今後の指導に生かし、深い学びのある生活科・総合的な学習の時間の実現を目指していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月4日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
所在地 〒248-0005 住所 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10
<https://www.kamakurasho.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校では、「自立に向けてたくましく生きる」という学校教育目標を基に、自己実現の3つの姿と共生の姿を目指している。児童生徒の学校生活の9年間で終わる目標ではなく、その後の人生にも生きる力の育成に向けて、研究テーマ「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～」を設定していた。今年度の重点として、生活科、総合的な学習の時間をLIFEに統合し、子供たちが自ら学びを進めることができる機会の充実に取り組んでいる。こうした研究テーマを基に構成された授業を参観し、児童の姿、教師の声掛け、授業デザインの工夫などを見取ることを通して、目的を明確にし、試行錯誤を繰り返しながら粘り強く取り組む児童を育成するための授業づくりのヒントを得るとともに、自身の音楽的知見を深めていく。

（1）小学校LIFE（生活科、総合的な学習の時間）

各教室を回り、LIFEの授業を参観した。LIFEは児童の生活に生きる力を発揮する場として、発達段階に応じた目標設定になっていた。

低学年では、幼児教育との接続を意識し、生活単元学習を行っていた。1年生は、動くおもちゃを作る活動を通して、みんなとともに楽しみながら遊びを創り出すことを目標とする。作る、試す、遊ぶ場の設定が分かりやすく、児童同士でルールを確認する姿や、遊び方を工夫する姿が見られた。

中学年では、各教科と関連した学習を行っていた。国語科「こまを楽しむ」の学習から想起しオリジナル独楽の開発をしている学級や、図工、音楽科と関連し粘り強くアニメーションづくりに向き合う学級、各教科の見方・考え方とLIFEの学習を往還しながらキャリア教育について考える学級など、児童の実態や、気づきを基に授業が構想されていた。どの学級でも児童は、自らの「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」という目標に向けて自分の学習を振り返り、調整しながら学習に向き合っていた。

（2）小学校4年音楽「耳に届け！ハピかまショップBGM」

小学校音楽の授業は、LIFEでの児童の意見を基に設定された単元である。LIFEの目標「たくさんの人に買ってもらい買い手も嬉しくなるお店作り」のために、「お客さんと呼び込むオリジナルBGM（宣伝効果のある音楽）を作ろう」とし、学級全体が必要感をもって学習に取り組む姿が見られた。

単元は、①楽曲分析②BGMづくり③歌い方の工夫の順で構成されている。本時の授業は、単元最後に位置する「歌い方の工夫」についての学習であった。完成したBGMをどのように歌えば、よりたくさんの方の耳に届くのかについての思いや意図をもつことができることを目標とし、達成するために前時までの学習に基づきながら進められていた。前時に録音したオリジナルBGMを聴いた後、児童の「今のままだと暗くてたくさんの方には届かない。」「キラキラチャームの歌詞の部分が伝わってこない。」などの意見から本時の課題解決へと向かう。はじめは歌い方について、今までに楽曲分析した『きのこの唄』『ミラクルショッピング～ドン・キホーテのテーマ』の歌い方と比較して考えを深める姿が見られた。途中、児童の旋律を変えてはどうかという意見から、BGMを作り直す活動が主となる。しかし、児童の中には「変えなくていい」と考える児童もあり、どうするのかを学級活動の時間で決めることになった。その後、この単元がどのように進んだのか、どんな工夫を凝らしたオリジナルソングになったのか知りたい。

（3）中学校3年音楽「成長って何？自分と仲間を高める合唱づくり」

中学校3年音楽では、「合唱を仲間と作り上げる楽しみを感じながら、成長に気づきながら仲間

と曲を作り上げること」を目標としていた。マイナスの視点や改善点に注目しやすいという生徒の実態を捉え、手立てが講じられていたことで生徒が楽しみながら成長に気付いている姿が見られた。歌声成長シートには、中学1年生との合同練習での気付きや、自分が中学1年生の時の実技試験の動画から変化したことについて記入してあった。1年生や1年生の頃の自分と比べると、声が変わっていることや、歌い方が成長していることに気付き、それらを生かしてパートごとの練習により真剣に向き合っているように感じた。最後に、全体で合唱した後には、成長している点と「もっと響かせるためにはどうしたらよいか。」など次の学習につながる発言があった。生徒が自分の考えた表現に向かって試行錯誤しながら挑戦していた。

4 感想

今回の研修を通して、以下の4つについて考えた。

1つ目は、リトミックについて。小学校の授業では、導入でリトミックを用いていた。児童は教師の弾く演奏に合わせてかがんだり、ジャンプをしたり、じゃんけんをしたり活発に活動をしていた。音楽に合わせて身体を大きく動かすことで、緊張がほぐれ、歌うことが恥ずかしい子や、音楽に苦手意識がある子でも、音楽を感じ取りながら笑顔で楽しむことができる学んだ。さらに、授業デザインシートや授業前の教師と児童の会話から、年間を通して遊び要素を取り入れながら身体全体で音楽を感じられる活動を行っていることがうかがえた。継続的に取り入れることは、児童の音楽への抵抗感を減らし、音や音楽に親しむ態度につながる。児童の実態に合わせて使用する楽曲や内容を工夫するなど、児童が楽しく活動に向かうことができる手立てを講じていきたい。

2つ目は、学習環境について。小学校の単元では、子供の「やりたい！」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくりに重点を置いていた。楽曲分析では学習形態を児童が選択できるようにしたり、歌唱表現を考える際は相談しやすい座席配置をしたり、活動内容毎に環境づくりの工夫が見られる。また、教師は児童同士の話やつぶやきをひろい、他の児童に投げかけて授業を展開していた。発表できる児童だけでなく、上手く言葉にできない児童の意見も取り上げ、なんとなくを学級全体で明確にしていこうとしていた。こうした教師の働きかけが安心して発言できる雰囲気を醸成し、子供一人一人の「やりたい！」を引き出していると感じた。学習にあった形態を工夫することや、児童のつぶやきを大切にすることを通して、児童の思いや意図を育てられるように努めていく。

3つ目は、ICTの活用について。小学校、中学校ともに、タブレットで歌声を記録し、振り返る活動を行っていた。小学校では、録音したBGMを振り返ることで、「もっと～したい。」「～したほうが良い。」など課題意識をもつ姿が見られた。中学校では、自身の成長や変化に気付くことができなかった児童が、2年前の自分と比較することで、成長を客観的に気付くことができていた。歌って終わりにするのではなく、タブレットを活用し振り返りを行うことで、試行錯誤を繰り返し、自分の思いや意図を明確にもつことや自らの学習を調整することができる。他にも、楽曲分析でメンチメーターを使うことで楽曲の曲想を捉えやすくしたり、旋律づくりでタブレット内のアプリを利用することで簡単に作曲ができたり、様々な場面でICTが活用されていた。今回の参観で、改めてタブレットの有効性を実感した。タブレットを使うことが目的にならないように学習の目標を捉え、効果的にICTを使っていきたい。

4つ目は、教科横断的な学習について。小学校の授業は、LIFEの学習と関わり、歌詞づくりでは国語科と合科していた。音楽の学習が他教科の学習と結び付けことで、学校での学習が自分の生活場面で生かされていることを実感し、児童が主体的に取り組み、学びが深まっていると感じた。これまで音楽科を国語科などの教科と関連付けができていなかったため、他教科の学習とのつながりを意識していきたい。

最後に、小学校、中学校ともに教師の音楽技術の高さを感じた。児童の「～風な曲調にしたい。」というつぶやきがあれば変調した曲を作り、教師のピアノの伴奏に合わせて児童が歌うことが当たり前に行われていた。既成の音源ではできない音の響きや広がりを楽しみ、実際に演奏をする素晴らしさを感じた。今回の研修を通して、学んだことを少しずつ取り入れ、授業改善に生かしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年 11月23日(土)
- 2 派遣先 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
所在地 〒232-0061 横浜市南区大岡 2-31-3
<https://yokochu.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

これからの「学校」のあるべき姿を追求するV
～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の工夫～

(1) 視校における研究への取り組み

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校では、令和2年度からこれからの学校のあるべき姿を追求してきた。最終年度の令和6年は、「主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の工夫」をテーマに研究に取り組んでいる。教師たちが生徒をどのように指導・評価をして、学習指導をどう改善していくかを詳らかにしている。「主体的に学習に取り組む態度」は「知識・技能」や「思考・判断・表現」と切り離して考えることはできない。そのため、「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」の指導や評価について研究した後、それらの研究の成果を生かして主体的に学習に取り組む態度を育成するための授業づくりや評価について研究を進めている。その育成のためには、「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」を育成する過程で、生徒が「粘り強さ」を発揮したり、「自らの学習を調整」したりすることが重要であり、教師側の指導が必要不可欠である。そこで評価方法の仕方では、目標とする資質・能力を身に付けるために自ら工夫して学習に取り組んでいるかどうかを評価することや、自らの学習を振り返り、学習のよさや意義について実感し、今後の生活や学習に生かそうとしていることを評価することなどを課題共有し実践している。さらに、学習のプロセスを大切にしながら、発問やワークシートなどを工夫し、習得した知識や技能を活用して思考・判断し、表現するような課題を設定するなど、主体的に学ぶ生徒の育成を各教科がチームとなって取り組んでいる。

(2) 実践発表

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校の保健体育科の授業では、生徒一人一人が見通しをもって活動し粘り強く取り組み、自らの活動を振り返ることで学習の改善を図る授業を展開している。また生徒に興味・関心をもってもらうために「①単元を貫く問いの設定による発問の工夫」「②運動感覚を養うために効果的な用具の導入」を行っている。

第1学年保健体育「ネット型バレーボール」の授業では、生徒が習得したい知識や技能についてその能力を育成するために、AARサイクル(図1)の授業デザインをしていた。AARサイクルとは見通し(Anticipation)、行動(Action)、振り返り(Reflection)を意味し、生徒は行動をする前に自身やチームの習得したい動き、プレイを明確にし、見通しをもたせてから練習に取り組んでいた。話合いの場面(図2)では、前回の授業でのプレイをタブレットを用いて振り返り、課題を把握していた。課題から本時はどのような練習メニューを行うのか。自分たちに必要なことは何かなどの、話合いが明確化されており、運動が得意な生徒だけが楽しむような授業ではなく、苦手な生徒も積極的に意見の共有を図っていた。バレーボールの試合では、「Aさんの次にBさんに

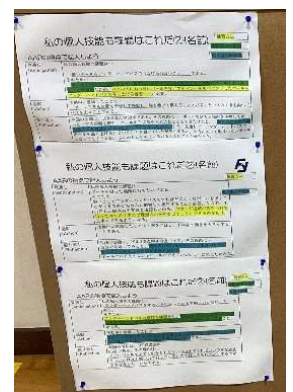


図1 バレーボールにおけるAARプラン

パスをする」ことや「友達との間隔を広げてパスを送る」「ボールをつなぐために必要なことは？」など、試合中に生徒同士の教え合いがなされていた。これまでの授業で、自身ができなくても「見てわかること、感じたことを伝えること」「技能や AAR サイクルの共有」「積極的に取り組める環境づくり」を粘り強く取り組んできたという研究協議の際に言われていたことが今後の授業を構成する上で大変参考になった。



図2 AAR プランを考えている生徒の様子

(3) 日本体育大学教授石田有記先生による講話 「資質・能力の育成と学習評価」

講話では、新学習指導要領の改訂のポイントについて述べており、すべての教科等の目標・内容を「資質・能力の3本柱」で再整理し「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業を改善していかなければならないということであった。3つの柱とは、学びに向かう力・人間性等(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)知識・技能(何を理解しているか、何ができるか)思考力・判断力・表現力(理解していること・できることをどう使うか)を意味し、3つの柱が学習の過程を通して相互に関係し合うことに留意が必要であることを述べていた。また学習指導要領理念とは教育課程の基準を大綱的に定めるものであり、各学校が創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた「教育実践」や「学術研究」の蓄積を生かしていくことが今後もっとも重要であると示されていた。

(4) 京都大学石井英真先生による講話 「観点別評価をどう捉えるか」

「観点別評価」と「指導と評価の一体化」の意味を述べていた。ねがい・ねらいをもって目的意識的に子どもたちに働きかけたならば、自ずと評価はついてくるが逆に目標が出口の子どもの姿でイメージできていないことが、深い学びや探究的な学びの評価に難しさがあると述べ、指導と評価の前に「目標と評価の一体化」を図ることが大切であることを学んだ。また、評価観の転換の必要性では、「総括的評価(最終的な学習成果の判定のための評価)と形成的評価(指導を改善し子どもを伸ばすために行われる評価)を区別することで、評価に関わる負担を軽減することができるとともに、授業の中で無自覚に行われてきた子どもの学習状況の把握場面を形成的評価として意識することが学習改善に直結していくと感じた。

4 感想

これからの学校のあるべき姿を追求するために5年間の研究を続け、生徒の学びをいかに「評価」し、その後の学習や指導にどう生かしていくのかについて大変勉強になった。各教科とも「主体的に学習に取り組む態度」を育成するためには、生徒が試行錯誤したり自ら学習を調整したりする学習や場面を工夫して設定することが重要であると感じた。また、学習のプロセスを大切にしながら、発問やワークシートなどを工夫し、習得した知識や技能を活用するために思考・判断し表現ができるような課題の設定をすることも大切であることを再確認した。本研修を通して、新しい教育方法について考えることができ、今後の授業を構成する上での参考になった。また、授業に限らず、日頃の学級経営が安心できる雰囲気になっているからこそ、このよう授業ができるのだと感じた。授業改善だけでなく、学級づくりを見直す研修の場となった。この素晴らしい実践を今後の指導に生かしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月25日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 千葉県我孫子市立我孫子中学校
所在地 我孫子市高野山537
<http://https://schit.net/abiko/abk-jh/>

3 研修内容

（1）内容選定の理由

中学校のプログラミング教育必修化の背景には、「Society5.0」の実現がある。

「Society5.0」とは「仮想空間と現実空間の高度融合によって、経済発展と社会的課題の解決を行う人間中心の社会」を指しており、中学校のプログラミング教育の目的は、「Society5.0」の実現に向け、生徒が生活や社会から問題を見いだして、解決できる人材を育成することである。中学校の技術・家庭科では、情報に関する技術を様々な側面から捉え、プログラミングに関する知識・技能を養うとともに、生活や技術を工夫し創造する能力を養うことを目的にしており、これからの時代を生きる我々にとって必要不可欠で欠かすことのできない力であると考え。

今回の第63回関東甲信越地区中学校技術家庭科研究大会千葉大会（以下、関ブロ）に参加し、これまで研究を進めてきた我孫子中学校の発表を参考にすることで、自校でも情報に関する技術について研究を深めていきたいと考え、今回の派遣先に希望した。

（2）関ブロ千葉大会における研究について

第63回関東甲信越地区中学校技術家庭科研究大会千葉大会
研究主題 「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成」
～主体的・対話的で深い学びを通して～

第63回関ブロにおいて、千葉県では教師指導から生徒が主体となる授業への転換を図り、生徒が自分の手で課題を解決する力の育成（学びの自立）を重視し、研究を推進しているとのことであって、研究主題を「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～」とし、それらを実現する手段として、授業改善のポイントをまとめた「10の授業デザイン」を設定し、「主体的・対話的で深い学び」のより一層の充実と、生徒の学びの自立を図るための授業改善に千葉県として取り組んでいるとの発表があった。



千葉県が取り組む子どもが問題解決能力を身に付けるための重点事項

【授業者】授業を変える ・教師主導から生徒主体へ

・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 → 主体的・対話的で深い学び

【学習者】学び方や学ぶ姿勢を身に付ける

・教師の役割 授業をデザインする ・生徒の目標 学びの自立を図る

○研究会が考える技術分野の学びの自立について

・技術分野の学びの自立における「目指す生徒像」

- 1 技術に関心を持ち、積極的に関わろうとする。
- 2 生活や社会の中から技術に関する問題を見いだそうとする。
- 3 課題解決のため自分なりの解決方法を考える。
- 4 振り返りをもとに、よりよいものに改善しようとする。
- 5 学んだことをもとに、生活や社会に関する技術について評価、選択できる。

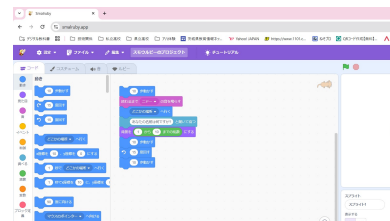
(3) 公開授業実践

授業者	我孫子市立布佐中学校 浅妻 永一朗 先生
本時の課題	対象者（高齢者・幼児）に合わせた双方向で楽しくできるゲームにするためにはどうすればいいだろうか

① 学び方や学ぶ姿勢を身につけるための教材の工夫

本授業では、簡単なキーボード操作で視覚的にプログラムを作成できるオープンソースソフトウェアの「Smalruby」を使って授業が進められていた。ゲームの簡単なプログラムを作成することをベースとし、ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツへと更新する学習活動へ展開していく内容である。さらに、ゲームのプログラムが複雑になりすぎないよう「対象者（高齢者・幼児）でも楽しめるゲーム」という条件をつけ、単純かつ繰り返し楽しめるゲームを制作することをねらいとされていた。

また、生徒が新しいプログラムを考えたり、うまく動作しなかったりした時のために過去の学習内容をまとめた「プログラミングヒントカード」を配付し、学びの自立を促す工夫が施されていた。



Smalruby の制作画面



プログラミングヒントカード

② 学びの自立を図るための授業展開の工夫

1組2～3人の小グループでプログラム制作を行っていた。それぞれのグループで話し合いを行いながらゲームの制作・デバッグをする活動や、他のグループと改善したプログラムを見せ合い、評価する活動があった。情報における学習では、個人での活動になってしまいがちだが、本時では各グループで積極的に話し合いが行われていた。制作内容を個人での基礎的な制作から双方向性のコンテンツに発展させ考えたことや、体験したことを他の生徒と話し合う機会を作り、小グループ同士での考えや体験の共有など違う視点から見つめ直す場を設定したことで、主体的で対話的な学習が生徒間で行われていた。



小グループ同士でプログラムを紹介する様子

また指導計画では、毎時間の授業の中に「制作したプログラムを相互に評価・改善」する活動が行われており、今までの学習の積み重ねと教員の学習展開の工夫が本時の主体的で・対話的な学びにつながっていると考える。

学習の流れ

- | | | |
|---|-----------------------------|-----------|
| 1 | 前時の学習を振り返りながら、本時の学習内容を確認する。 | 【見い出す】 |
| 2 | 前時の時点のプログラムからの改善する点を考える。 | 【自分で取り組む】 |
| 3 | 話し合った改善点を元にゲームの制作・デバッグをする。 | |
| 4 | 改善したプログラムを見せ合う。 | 【広げ深める】 |
| 5 | 本時の学習を振り返る。 | 【まとめ上げる】 |
| 6 | 本時の学習を踏まえ、次時の学習につながるめあてを持つ。 | |

4 感想

今回の研修を通して気が付いたことは、生徒たちが普段とは違う環境の中でもしっかりと主体的に学習に取り組んでいたことである。それは生徒一人一人の努力であるとともに、普段から教師側が学びの自立を意識しながら授業内容や展開、発問などを工夫し、実践しているからこそ生徒が授業に対して主体的で対話的に取り組む姿勢を身につけていると考えられる。授業を参観することで、教師主導ではなく、生徒主体の授業の大切さを感じることができた。今回の経験を生かし、「主体的・対話的で深い学び」のより一層の充実と、生徒の学びの自立を図るための授業改善にこれからも努めていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月8日（金）
- 2 派遣先 学校名 木更津市立清川中学校
- 所在地 千葉県木更津市中尾 1096

https://www.fureai-cloud.jp/_view/kisa-kiyokawa-j

3 研修内容

- ・第48回 関東甲信地区 中学校英語教育研究協議会 千葉大会
- ・Inspire! 「使える」にシフトする 英語教育の推進! ～主体的に学び、楽しみ、発信し、仲間と深め合う授業の創造～
- ・発表者 木更津市立清川中学校 教諭 鎌寄 由美子
- ・指導助言 南房総教育事務所 指導主事 榎並谷 恵

(1) 研究の概要

研究テーマ：Inspire! 「使える」にシフトする英語教育の推進！

～主体的に学び、楽しみ、発信し、仲間と深め合う授業の創造～

言語活動の充実のために、「理解していること・できることをどう使うか」に焦点を当て、研究を行っていた。研究においては、聞くこと、読むことで得た情報を的確に理解し、自分の言葉でわかりやすく説明するリテリングの活動を中心に行っていた。生徒の英語運用能力を高める指導法について研究を進めていた。

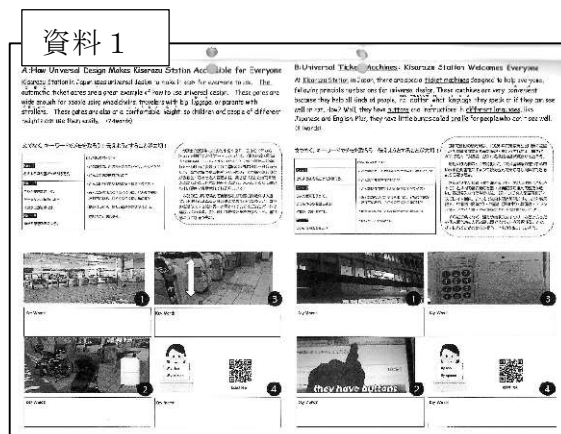
(2) 授業の展開から

- ① スモールトークの話題として、生徒は事前にタブレット上に自分が興味をもったニュースの写真を準備しておき、3～4人のグループで順番に「どのようなニュースなのか」、「どうして選んだのか」について話をしていた。話し方については、定型文があり、それに自分の話したいことを当てはめて話しているので、多くの生徒が慣れた様子で行っていると感じた。また、一方的に話すだけではなくリスナーの生徒は、質問を投げかけるまでが組み込まれており、やり取りを積極的に行っている様子が見えた。「話すこと」の「やり取り」では、話し手の内容に対して、聞き手も相づち等だけでなく内容に関する質問をするなど、Q&Aだけで終わらない「やり取り」を続けることが本校の課題でもあるので、実態に合わせて取り入れていきたいと思う。

本時の活動では、木更津市内の身近なユニバーサルデザインについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりするリテリングの活動が中心である。ALTが示す例から、本時の課題について気付けるよう、木更津市内にあるユニバーサルデザインの施設等についてALTの提

示する写真を見ながら説明を聞いていた。説明を「聞く」だけでは、理解の難しい生徒にも実際の写真を見ることが、身近な場所にあるものなので目にしたことがある生徒も多く、理解を深める一助となったと思う。

その後、本時の課題であるユニバーサルデザインの英文の動画を視聴し、話し合っていた。グループは、8つのエキスパートグループに分かれており、そのグループで、どのように伝えるか話し合い、自分の意見を英語で言えるように本文から、Key words を書き抜き、それらを使って文は書かずに英文を考え、グループ内で発表練習を行っていた。生徒は、英文を抜き出すのではなく、どうにかしてKey words を使い、言い換えたり分かりやすく説明したりするパラフレーズの力があると感じた。ワークシートにはそれらの中には英文だけではなく、日本語で情報やヒントが盛り込まれていて、英語が苦手な生徒には有用であると感じた。



- ② ホームグループで行ったリテリングの発表の内容が、相手に伝わったか、内容を理解しているかを確認するために、お題に沿った問題を出題する。生徒は、英語で出題された問題に、リテリングの内容を思い出しながら答えていく。リテリングを行うだけでなく、問題形式でリテリングの内容を確認することで理解を深めることができ効果的だと感じた。さらに、フィードバックとして良かった発表を全体で共有する予定であったので、そこまで時間内で終わらせることができれば、内容だけでなく良い表現方法などの確認にもなるので、有効だと思った。

4 感想

本校でもリテリングを苦手と感じている生徒はとても多く、私自身も常に効果的な方法を模索している。リテリングは「読むこと」と「話すこと」を統合した力を求められ、より高い英語運用能力を求められるため苦手意識もより高いのだと感じる。公開授業では、エキスパートグループとホームグループの2つのグループに分け、エキスパートグループで得た情報をホームグループのメンバーに伝えるという目的意識を持たせることで、より生徒への学習意欲の意識付けにつながっていると考え。本校でも、是非取り入れたい方法だと感じた。また、協働学習にすることで、英語が苦手な生徒も一生懸命課題に取り組んでいるように見えた。また、英文を読んでリテリングする際はメモであり、英文を書かないようにすることは、苦手な生徒にとっては不安であり難しいことであるが、多くの生徒がメモで発表を行っていた。1年生の時から繰り返し、そして少しずつ力を付けていく必要性を改めて実感した。本校の生徒の実態に合わせて、今後も自己研鑽に励みたい。

1 派遣期日 令和6年 8月1日(木)～8月2日(金)

2 派遣先 学校名 東京都台東区立根岸小学校
所在地 東京都台東区根岸3-9-8
<https://www.taito.ed.jp>

3 研修内容

(1) 実践報告1 【低学年分科会】「模擬授業」

大分県 別府大学明星小学校 教諭 時枝 智美先生

- ・主題名 よいと思うことをすすんで
- ・内容項目 A 善悪の判断、自律、自由と責任
- ・教材名 「ぼんたとかんた」

① 導入

これまでの経験を振り返り、人として行ってよいこと、社会通念として行ってはならないことを、自らの判断によって区別することを通して、本時のねらう価値への導入が図られた。

② 展開

ぼんたとかんたの行動の違いを明確に捉えやすいよう、ペープサートで教材提示を行う。正しいことをするため、またはよくないことをしないために、どのようなことを理由に判断しているか話し合う。

③ 終末

自分が自らの判断でよいことをすることは、自分に誇りをもった晴れやかな人生を送ることにもつながっていくような声掛けをした。

(2) 実践報告2 道徳科の授業づくり「道徳授業を支える汎用的な能力の育成」

大分県 別府大学明星小学校 教諭 時枝 智美先生

道徳授業を支える汎用的な能力とは

① グループ学習(話し合うこと)

よりよい話し合いになるために役割を与える「役割分担カード」や「グループタイムの進め方」のポイントシートを活用する。これらを使うことで、どの児童も平等・公平に役割を担うことができる。司会には「司会の進め方」のポイントシートがあり、司会に慣れていない児童には安心材料となっている。

② ワークシートの記入(書くこと)

児童の「うれしかったです」などの単なるワンフレーズでは、記述内容を評価に活かすことが難しい。国語科の説明文の学習のように、事実(根拠)事例を書くように指示し、ワークシートにも明記してきた。国語で学習したことを意識すると書く文章量が増え、自分自身がより深く考えることにつながった。ワークシートを共有すると自分の考えを友達に分かりやすく伝わるようになり、他者理解が深まった。

③ 発言(話すこと)

- ア.W法を使う →相手の方を見ないと伝わらないから
 - イ.はっきりと言う →なにを言っているのかわからないから
 - ウ.前を見ながら指を指して話す →相手を見たほうが聞き手も惹きつけられるから
 - エ.思い出せない言葉は臨機応変に対応しうまくつなげる
→言っていることがおかしくなったら、聞く手が聞く気にならないから
 - オ.間を開ける →早口だと聞こえづらいかもしれないから
- これらは、6年生国語科の「聞いて、考えて深めよう」のプレゼンテーションの指導

を通して学んだ記述内容で、教室に掲示をしている。その結果、発表することに自信をもつ児童が増え、発表が楽しくなり発表したいと思う児童が増えた。発言は、一定の児童に偏ることがあるため、発達段階に応じた内容を工夫する必要がある。

(3) 講演会の報告

講演1 「道徳科授業マネジメント～道徳科の特質を生かして～」

帝京大学教育学部 初等教育学科 教授 赤堀 博行 先生

① 教育活動全体を通じて行う道徳教育の進め方

- ・各学校の具体的な道徳教育の重点目標を設定する。
- ・道徳教育の重点目標を明確にする。
- ・道徳教育の重点目標のポイントに関わる道徳内容を明確にする。
- ・当該の道徳の内容に関わる道徳以外の指導を明確にする。
- ・道徳科以外の指導内容及び、時期を明確にする。

② 学習指導案作成の実際

- ・どのような道徳的価値をねらいとし、どのように教材を活用するのかを構想する。
- ・ねらいは45分を通して行うもの。気付かせる学習ではなく、考えさせる学習。

③ 主題設定の理由とは

明確な指導観をもち、児童の肯定的な面やそれをさらに伸ばしていこうとする観点からの積極的な捉え方を心掛ける。児童の学習場面を予想したり、発達段階や指導の流れを踏まえたりしながら、より具体的で積極的な教材の生かし方を記述する。

④ 発問の留意事項 道徳的価値を自分事とし考えられるには

- ・道徳的心情を考えさせる→「気持ち」を問う。
- ・道徳的判断力を考えさせる→「考え」を問う。
- ・道徳的实践意欲を考えさせる→「気持ち」、「考え」を併せて問う。
- ・道徳的態度を考えさせる→「気持ち」、「考え」を併せて問う。

講演2 「共によりよく生きる児童を育む道徳教育」

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 国立教育政策研究所
教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 堀田 竜次 先生

① 自己の生き方についての考えを深めるために

- ・児童が道徳的価値にかかわる事象を、自分自身の問題として受け止められるようにする。
- ・他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で、自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにする。
- ・これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いやねがいを深めることができるようにする。

② 道徳科における児童の学習及び、成長の様子についての評価

個人内評価として見取り、記述により表現することの基本的な考え方

- ・児童が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと、発展させているかどうかという点。
- ・道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかという点。

4 感想

道徳教育は道徳科だけで行うものではないということを改めて確認した。学校教育全体の中でも、各教科の指導を通じて道徳性を養うために、道徳的価値を意識しながら指導することで道徳教育の効果が一層高まると考える。また、教師の探求心や真理に対する謙虚さは児童の実践意欲を触発するのではないかと思う。道徳の目標や内容に示されている精神を自らが実践するように心がけていきたい。児童が自分事として考えられるように、一つ一つの発問を明確な指導の意図をもって設定できるような授業改善を日々、考えていきたい。

令和6年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立駒王中学校 教諭 木村 星斗

- 1 派遣期日 令和6年11月15日（金）
- 2 派遣先 取手市立取手第一中学校 茨城県取手市吉田470

<http://www.city.toride.ed.jp/0820008>

取手市民会館 茨城県取手市東 1-1-5

<https://www.toridebunka.com/toride-civiccenter/>

- ### 3 研修内容

「生徒が主体となり、一人一人が輝ける文化祭の運営と実践」というテーマを設定し、
 取手第一中学校文化祭「輝風祭」の見学および担当教師との懇談を行った。

午前の部	
時刻	内容
9:00	取手市民会館着 校長・特活主任への挨拶
9:30	開祭式
第1部 合唱コンクール	
9:55	1学年の部
10:30	2学年の部
11:15	3学年の部
12:00	昼食 校長・特活主任との懇談

午後の部	
時刻	内容
第2部 ステージ発表	
13:00	吹奏楽部発表
13:35	生徒会本部発表・英語プレゼンテーションフォーラム発表
13:55	有志によるステージ発表
14:30	P T A発表・教職員サプライズ
15:00	閉祭式
15:45	取手市民会館発

〈取手市民会館に到着〉

取手市民会館は、取手第一中学校より2.5km程離れたところにある収容人数1000人ほどのホールである。駐車場は、会館周辺のものだけでなく、利根川沿いの河川敷



駐車場を開放していたため、多くの保護者が車で来場していた。生徒は現地集合で、私が到着した9時前には、雨の中河川敷の広場で傘を差しながら各クラス最後の合唱練習を行っていた。その後、先生方に挨拶をし、控え室・ホール客席へと案内された。

〈合唱コンクール〉

第1部では、合唱コンクールが行われた。1・2学年は4クラス、3学年は5クラスで、

クラスの数が多いだけに競争意識が強く、熱量の高い合唱であった。主に3年生の合唱において、クラスで考えたオリジナルの歌詞を組み込んだり、ピアノの楽譜をアレンジしたりするなど、多くの工夫がみられた。第1部終了前に、特活主任の先生から、昼食前の座席の場所取りをしないようにアナウンスがあった。運営を円滑に進めるために、保護者に協力を依頼することは重要だと感じた。

〈昼食時、校長・特活主任との懇談〉

第1部が終わり、昼食を取りながら、校長・特活主任との懇談を行った。取手第一中学校の生徒は落ち着いており活動に前向きに取り組むことのできる生徒が多いことや、PTAによる会場設営・準備や駐車場警備、ステージでの発表等、多大な協力を得て、運営が成り立っていることなど、学校や輝風祭のことについて話を伺った。また、服装などの校則について質問したところ、生徒総会での話し合いを経て、白い靴だけでなく黒い靴の着用が認められるようになったこと、ジェンダーレスの観点を踏まえたブレザー型制服の導入が進められているということを知った。

〈ステージ発表〉

第2部では、ステージ発表が行われた。どの団体もこの日を迎えるために懸命に練習を重ねてきた様子が伝わった。吹奏楽部発表では、3学年合わせて68名の大規模な演奏が魅力的であった。英語プレゼンテーションフォーラムでは、「発表の途中で質問された生徒は、日本語でもよいので教えてください。」と、聴き手を飽きさせない工夫がみられた。生徒によるダンスやコント、歌唱の発表も行われた。自分たちのやりたいことを実現するため主体的に準備を進めてきた様子がうかがえた。ステージ発表全体の総合司会があり、本校でも取り入れたいと思った。

〈PTA発表・教職員サプライズ〉

第2部の終盤では、PTAの方々と教職員によるダンスパフォーマンスやコントが行われた。生徒は客席から手拍子をしたり、一緒にステージに上がったりして、PTA・教職員・生徒が一体となってステージを創り上げる様子が印象的だった。

4 感想

今回の視察でもっとも強く感銘を受けたことは、生徒の活躍を裏で支える教職員やPTAの方々の懸命さだ。特にPTAの方々に関しては、駐車場や会場周辺の運営面だけでなく、生徒を楽しませるための発表にも力を入れていたことに驚いた。生徒の活動を見守り、協力していくその温かさを本校の特別活動でも取り入れたい。最後に、今回お世話になった取手第一中学校の先生方、生徒に感謝をし、研修報告とする。

- 1 派遣期日 令和6年8月23日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）千葉市民会館
所在地 千葉県千葉市中央区要町1-1

3 研修内容

「第58回全日本特別支援教育研究連盟関東甲信越地区特別支援教育研究協議会千葉大会」
大会テーマ「新しい時代の教育を創ろう！～一人一人が豊かに生きるために～」

（1）全体会記念講演 演題「HSC『超空気を読むこどもたち』が素晴らしい力を発揮する」
講演者 NPO法人千葉こども家庭支援センター理事長 杉本 景子氏

・HSC＝ハイリー センシティブ チャイルド＝超空気を読むこどもたち

人の気持ちや刺激に敏感なこどもたち・控えめで思慮深いこどもたちの存在を意識するようになると、今までと違った視点を持てるかも知れない。

・どうやってこの子どもを理解していくか。

HSP＝パーソン＝大人（アメリカの心理学者エレイン アーロン提唱）

生まれ持った気質15～20%男女問わず、敏感さを生まれ持った人がある。

赤ちゃんの頃は、よく泣く・すぐ目覚める・親の気持ちを察する・目で物をよく追う等の気質→先天的な性質で性格の基礎となる。動物にも15～20%いる。種の存続に必要な割合である。

・障害や疾病ではないので診断や治療をするものではない。福祉サービスを受けられない。

【DOES】4つの判断軸にあてはまるとHSCと考えられる。

【D】深く処理する Depth of processing 思慮深い・調べてから提案・まあいいかは苦手・トラブルをあらかじめ想定・根拠をもって言動・常に考え事をしている・他人への影響を気にする。他人への影響を気にする「真似しているとおもわれないかな」

モラルを内面化「だれも見えていなくてもきちんとやりたい」トラブルを想定「〇〇くん、△をしてないから先生におこられないかな」等の心配が多いが、必ずしも悪いことではない。

【O】過剰に刺激を受けやすい Over stimulated 音・暑い・寒い・空腹・光・におい・ちくちくする服・味・痛み・合わない靴・濡れた服・サプライズ等が苦手。感覚面での不快感がストレス。ちくちく服・大きな音が嫌だからすぐにHSCではない。

【E】全体的に感情の反応が強く特に共感性が高い Emotionally Empathy 涙もろい・怒られている人を見るのがつらい・些細な間違いに強く反応する。

喜んでいる人を見るととても嬉しい＝素敵だが気付かれづらい性質

※学校では、しかられている子がいると「いやだな」と思っていたり、友達のペットの死に対する悲しみをいつまでも引きずったり、戦争等のニュースの死者に対しての思いを引きずったりする。一方で、嬉しい気持ちもずっと残る良い面がある。

【S】些細な刺激を察知する（思考や感情のレベルが高いことによる）人の外見・声のトーン・物の配置変化にすぐ気付く。

※学校では、芸術作品にとっても感動したり、「先生はこの質問したら助かるかな？先生ちょっと今日は機嫌悪そう」と気遣ったり、新しいポスターに気付いたり、花が咲いた・生き物の変化があったなどにすぐ気づいたりする。

以上4つの判断軸すべてあてはまるならHSCと言える。しかし全員が内向的ではなく、30%は外向的で社会で活躍する人も多い。大切と思える物のためには自分の心地よさを犠牲にしてもリスクを冒すことをためらわない人や社会正義のためにリーダーとして活動している人も多い。

こどものリーダーの中にもHSCはいる。よく考えてくれたり、誰も見ていなくても一生

懸命やっていたりして、よさが生かされている。よさが表われているうちにこの子がHSCであることを気付く自覚していくことやよく気付くことを前向きに捉えてあげることが大切。

- ・発達障害なのかHSCなのか・・・ ちがいは表面上似ていることがあり、HSCがADHDと誤診されているという専門家も居る。発達障害は医学上の診断であり、HSCは気質である。HSCの大半は左脳に比べて右脳の血流が活発。用心システム>冒険システムADHDの大半は右脳に比べて左脳の血流が活発。冒険システム>用心システム落ち着きがない用に見えるHSCは心配事をしている。(あれは落ちそうで危ないな)ASDは場の空気を察することや相手の立場になって考えるのが苦手なフリーズする。
- ・HSCによくあること人に気を遣う・人に合わせる事が習慣化・人の期待に応えることを重視し疲労蓄積・過剰適応してしまう・人からの評価を過度に気にする・完璧以外は恥ずかしい 否定的な評価に目が行きやすく自己肯定感が低くなりがち・自他の境界は薄い(共感しすぎる)
- ・HSCが苦手な相手(自分のことばかり話す人 わけもなく怒る人 不機嫌な人 話の止まらない人)このような人に好かれやすい 離れてもらえず苦しむことがある。
- ・HSCのサポートの仕方たくさん失敗して学ばせるよりよく準備して成功させるサポートを失敗は記憶に残りやすい 成功して自信をつけられる方法が気持ちが前向きに進む。先生ができるサポートとして、特に低学年の児童は人一倍先生を信じ、頼りにする。先生は絶対であると考えてるので、「失敗しても大丈夫」「いつもみんなのためにありがとう」先生がその子の好き嫌い(食べ物でも何でも)を覚えていてくれたことがとても嬉しいと感じる。読書好きが多いので、肯定的な言葉掛けがよい。先生の中にも5人に一人はHSP大人気質をもっている。よき理解者になるはず「それがいやなのわかるよ」特別な配慮ではなくお互いが尊重される環境をつくっていくと、秩序が保たれて思いやりに溢れる学級になる。
- ・「主体的に学習に取り組む態度」をどう見取るか以前は、発表の回数・ノートの取り方で判断していたが、現行の指導要領では、発表しなくても積極的に参加しているHSC(よく調べてから発表するなど、粘り強い取り組みや自らの学習を調整しようとする態度)が評価される。
- ・見守るポイント気持ちよく眠れているか・疲れは回復しているか・食事をおいしく摂れているか・自然な笑いがあるか等。
- ・HSPのセルフケアつぶされない工夫・十分な休息・意思表示習慣(選んで良い)・巻き込まれない工夫・夢中になれる時間を作る・疲れや我慢に気づける習慣をつける・断る勇気をもつ支援等。

(2) まとめ

発達障害とHSCがどちらがうのかと厳密に考えず、どんな子かを見取り、安心して生活できるように支援をしていくことが大切である。

4 感想

HSCについての定義や発達障害との違いについて、初めてよく分かりました。通常の学級にいるHSCと思われる子どもたちの抱える悩みや困り観を和らげることは、全ての子どもたちにとって居心地のよい学級になるということがよく理解できました。

- 1 派遣期日 令和6年8月9日（金）
- 2 派遣先 会場名 埼玉会館大ホール
所在地 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-4
- 3 研修内容

全国公立小中学校事務研究大会 大会テーマ 「子どもの豊かな育ちを支援する学校事務」
--

事務職員が事務をつかさどる役割を果たすことへの期待が高まっているなか、その期待に私たちが十分に答えられているとは言い難い状況がある。今回の研究大会は、今一度原点に立ち返り、ミッション・ビジョンの実現に貢献する学校事務の在り方について会員全体で考えを深め、事務をつかさどる事務職員・共同学校事務室の姿を共有する機会として開催された。

文部科学省行政説明 : 文部科学行政をめぐる最近の情勢について 講師 文部科学省 初等中等教育局 学習基盤審議官 森 孝之 氏
--

教師を取り巻く環境整備について

- 教育活動全体を通して、教育に関連するウェルビーイングの要素（自己肯定感・幸福感・自己実現など）の向上を図り、子供たちのウェルビーイングを高める。そのためには、教師をはじめとする学校全体のウェルビーイングが必要である。
- 学校における働き方改革の最終的な目的は、「全ての子供たちへのより良い教育の実現」である。
- 学校教育の質の向上を通じた、全ての子供たちへのより良い教育の実現のため、
 - ① 働き方改革の更なる加速化 ② 学校の指導・運営体制の充実 ③ 教師の待遇改善を一体的・総合的に推進する。
- 新しい時代の学びの環境整備（義務教育費国庫負担金）
 - ・ 小学校高学年における教科担任制の強化…令和7年度までの2か年分の改善数を計上
 - ・ 様々な教育課題への対応や、特例定員の活用…主幹教諭、事務職員等の配置改善
 - ・ 少人数によるきめ細やかな指導体制の計画的な整備等
 - …令和6年度は小学校5学年の学級編成の標準を35人に引き下げ
- 学校における働き方改革に資するための教諭等・事務職員の標準的な職務の明確化
- 学校事務の共同実施、「共同学校事務室」の制度化

学習指導要領、令和の日本型学校教育について

- 学習指導要領改訂の考え方…主体的・対話的で深い学びの実現
- 「令和の日本型学校教育」で目指す学びの姿…「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる。
- 学校事務職員が校内の業務改善を提案し実行していくことで教師の負担軽減につながる。
- 学校事務職員は事務を「つかさどる」存在として、学校運営に積極的に参画し副校長・教頭とともに校長を補佐する役割を果たすことが期待されている

GIGAスクール構想の推進について

- 直面する課題…地域・学校間で大きな活用格差、端末更新、学校のICT環境の改善
- 教師の資質能力の向上等について

- 「新たな教師の学びの姿」の実現、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成、教職志望者の多様化等を踏まえた育成・安定的確保

全体研究会Ⅰ： 全事研本部発表「子どもの豊かな育ちを支援する学校事務」
－校務運営参画の道を切り拓く事務職員の学びと実践－

第9次研究中期計画

マネジメントとリーダーシップで事務をつかさどり、主体的に校務運営に参画する。

第10次研究中期計画

戦略領域から事務をつかさどる職として主体的に学校の課題を解決していく。

提案Ⅰ つかさどる事務職員の現状と課題

事務をつかさどる姿

総務・財務等の専門性を軸に、教育行政職としての責任をもち、子どもの学びにかかわるすべての人との協働によって主体的・積極的に学校の課題を解決していくこと

事務をつかさどり校務運営に参画していくためには、事務職員自身が役割を自覚し、戦略的に行動に移す必要がある。

提案Ⅱ 校務運営に参画する事務職員の学びと実践

実践の効果を高める戦略的要素

①領域を広げる ②教育と行政をつなぐ ③教育を語る ④学び続ける ⑤耳を傾ける
事務をつかさどるための資質・能力

①コミュニケーション力学 ②学習継続力 ③課題発見解決力 ④専門性構築力
⑤政策形成力 ⑥情報活用力 ⑦人材開発育成力 ⑧仲介調整力

⇒学びと実践の往還により、自ら校務運営参画の道を切り拓き、子どもの豊かな育ちを支援する学校事務を実現する。

全体研究会Ⅱ： シンポジウム「子どもの豊かな育ちを支援する事務職員」

シンポジスト 埼玉県戸田市教育委員会教育長 戸ヶ崎 勤 氏

愛知教育大学教育学部教育学系教育ガバナンス講座 教授 風岡 治 氏

戸) ・組織のウェルビーイング

ストレスや不安は「仕事」と最も関連している⇒メンタルヘルスのマネジメント

・カリキュラム・マネジメントの鍵を握るのが、リソース・マネージャーである事務職員である。これまで以上に積極的に学校運営にかかわってほしい。

・困難を抱える子供たちのために事務職員ができること

⇒子どものセーフティネットの担い手として、必要な制度を整備し支援を届け、学校と福祉行政をつなぐ役割を果たすことを期待する。

・学校・子どもが抱える課題を解決するための架け橋となしてほしい。

風) ・経験を活かす： ディヴィッド・コルプの「経験学習モデル」理論

経験 ⇒ 検討 ⇒ 思考 ⇒ 行動

・組織の力になる職員とは・・・

組織や人を「つなぐ」役割を担う。

変化に立ち向かう意思と知恵を持つ。(試行錯誤の実践)

・夢なきものに成功はない。夢、希望を持ちながらひとつひとつ成功体験を積み重ねてほしい。そして、学校のウェルビーイングの実現に向けて、組織や人を「つなぐ」役割を担い、教育活動や学校経営にイニシアティブを発揮してほしい。

4 感想

他県の実践事例はもちろん、教育行政を担い様々な変革に取り組まれている戸ヶ崎勤教育長(埼玉県戸田市)と、事務職員経験もあり教育大学で学校事務職員養成にも携わっている風岡治教授(愛知教育大学)によるシンポジウムは大変興味深く、学校事務の在り方や事務職員の役割について理解を深める機会となった。

これからの学校事務職員の役員を自覚し、組織のウェルビーイングの力になれるよう、できることから行動に移していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年8月1日（木）
- 2 派遣先 ビジョンセンター西新宿
〒160-0023 住所 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエービル

3 研修内容

(1) 開会式

第75回関東甲信越静学校保健大会

「一人一人のウェルビーイングの実現に向けた豊かで健やかな心身の育成」

(2) 特別講演

演題「大相撲部屋の365日」

講師 大相撲 荒汐部屋 事務局 鈴木ゆか 氏

○周囲の理解

荒汐部屋では稽古場を開放的な景観（道路に面した正面の扉が透明ガラス張り）にすることで、稽古場で何をしているか周囲が見て分かるようにし、周囲の理解を得ている。

○相手への気遣いを身につけさせる

大相撲は中学卒業と同時に入門する門下生もいるため、食事の給仕や稽古、イベント等を通して礼儀や相手への気遣いを学んでいく。

○自己管理能力の育成

大相撲はケガに伴う競ではあるが、やはりケガをしないことが1番であると鈴木氏は話していた。関取を目指していてもケガで断念した選手は多くいるため、各々が睡眠や食事を始め、身体のケアを丁寧に行い、自己管理能力を育成していくことが重要である。

(3) 班別研究協議会 「学校経営と学校保健」教育目標の具現化を目指す学校保健

- ①「児童生徒の豊かな心とこれからの時代を生きる力を育む学校教育の一環として取り組む学校保健活動の在り方」

東京都 東京都立城南特別支援学校 主幹養護教諭 笹渕 真子

○養護教諭に求められる学校保健活動と課題

養護教諭は、児童・生徒の健康課題に対して中核的な役割を果たす。障害の重度・重複化に伴い、保健室の利用者が増加しており、養護教諭には学校保健だけではなく、特別支援教育の知識、医療・医学的知識、応急・救命できる力が必要になっている。

○課題

多職種との連携、保護者との連携、初任者研修・現任研修への参加・健康課題への研究

○課題に向けて養護教諭ができること（個、学校、地域、全都）

- ・多職種との連携〔個での取り組み〕

都立学校栄養士を対象とした都立学校栄養職員専門研修会にて、特別支援教育コーディネーター・栄養士・アレルギー専門メディカルスタッフと一緒に個別相談、個別指導の進め方及び配慮すべき点について、研修会の講師として参加。

- ・保護者との連携〔学校での取り組み〕

保護者と一緒に学ぶ「保護者のための性教育」をPTA主催で開催し、児童・生徒の心や体の発達、保護者としての不安について、小中高等部の保護者と一緒に学ぶ機会を設けた。

- ・研修への参加〔地域での取り組み〕

初任者研修では、異校種4校で多様な障害について学ぶ研修を計画した。自校に配属された初任者だけでなく、他校の初任者も一緒に校内研修を実施することで、異校種での養護教諭の職務を学び、教職員の支援の仕方など指導教員以外から指導を受ける機会を設ける。そのことにより、初任者は経験豊富な養護教諭から指導助言を受け、障害の知識だけでなく、校種によって求められる養護教諭像についても学ぶことができる。

- ・健康課題への研究〔全都での取り組み〕

東京都の特別支援学校の養護教諭全員で、新たな学校給食摂取基準の改訂に向けて大規

模の調査に協力し、児童・生徒の身体状況調査を実施した在校生の入学時から現在に至るまでの身長・体重記録・主障害名・てんかん発作の有無等の医療情報を集計し、東京都教育庁都立学校教育部学校推進課に提出した。そのデータを基に、給食摂取基準の基礎資料だけでなく、障害別の成長曲線を作成も試みた。

②「学校、家庭及び地域社会との連携による学校保健委員会の在り方」

群馬県 桐生市立黒保根学園 養護教諭 竹内 順子

○健康課題と重点目標

学校保健目標の具現化に向けて、児童生徒の健康課題を把握するため、1～6年を対象に「コツコツ貯金」、7～9年生を対象に「健康生活リズムチェック」と題する生活チェックシートを実施している。結果、就寝時刻が22時過ぎの児童生徒やメディア使用時間が平日3時間以上の生徒が年々増えてきていることがわかった。1つめの重点目標を「体力づくりの土台となる基本的生活習慣の確立」とし、基本的生活習慣を身につけられるように保健指導の充実を図ることとした。

1～6年生を対象に週1回フッ化物洗口を実施しているが、検診結果で毎年受診勧告者があり、フッ化物洗口に安心し、歯磨きが定着していないため「児童生徒が歯磨き習慣を身に付け、むし歯や歯肉炎予防などの歯や口の健康づくり」をあげ、歯磨きの習慣化、効果的なブラッシングができるよう指導の充実を図ることとした。

○学校保健委員会の組織づくりと計画

学校三師だけでなく、地域保健師や学校運営協議委員、5～9年生の児童生徒もメンバーとし、講演会も同時に開催することで連携した指導ができるようにした。

4 感想

特別講演では周囲の理解や自己管理等、保健室にもつながる講演であり非常に勉強になった。特に私は男性養護教諭という数少ない例であり、周囲の理解も浸透しきってはいないため、保健室を開放的にし、何をしているかが分かるように工夫し、少しずつ信頼を得ていきたいと感じた。

班別研究協議会での笹渕先生の発表は、健康課題への研究や特別支援学校における他職種・保護者との連携、新採指導が主な内容であった。特別支援学校の児童生徒は成長発達や疾患において一般的な児童生徒とは差があるため、笹渕先生の発表をそのまま本校で活用することは難しいが、新採指導に関しては他校の新規採用者も共に校内研修を実施しているとのことであるため、本校でも活かすことができるのではないかと感じた。

竹内先生の発表では義務教育学校（児童生徒数54名）における学校保健委員会の取り組みがテーマになっており、学校保健委員会時に生徒も参加し、歯磨きに関する劇や食育に関する劇を実施しているとのことであった。また、保護者が参加しているので2回目の学校保健委員会では薬物乱用防止教室や性教育講演会も実施しているとのことであった。保健指導や保健教育は保護者にも参加してもらうことで家庭の教育力向上につながるため本校でも取り入れたいところであるが、学校規模が違うためそのままの取り入れは難しい。オンラインやQRコードを用いた動画視聴が家庭でもできるような工夫をしたいと感じた。

今回の研修内容を活かすためには学校規模や子供たちの実態に応じた工夫が必要であった。子供たちの健康課題が多様化しているため養護教諭のみで対応するのではなく、学校・家庭・地域が積極的に連携し、子供たちが豊かで健やかな心身の育成ができるよう努めたい。